

「浪曲定席 木馬亭よ、永遠なれ。」を書いた

おさだ まもる
長田 衛さん

東京・浅草寺のほど近くに建つ木馬亭は唯一の、浪曲のための定席（常設劇場）だ。若手から大御所までが節（歌）とたんか（せりふ）を響かせる空間は、何とも言えない心地よさがある。

ただ、浪曲の人気は長らく低迷し、「浪曲の最後のとりで」の木馬亭の集客も苦戦が続く。1970年の開業時は毎日開かれたが、2012年から定演は毎月1日から7日間だけ。約130席のうち平日の日に埋まるのは30〜40席ほど。出版社を定年退職したばかりの一ファンが「浪曲、木馬亭の灯を消してはならない」との思いをこの一冊に込めた。

「通い始めた約25年前は客は5、6人しかいませんでした。その寂しさを乗り越え、仕事で鬱屈していた当時の気分に合わせて浪曲を演奏させてもらった恩返しをしたくて本にしました」

本書は2部構成で、第1部はインタビュー集

大衆芸能の世界 深く軽妙に

「芸豪烈伝」。1994年から98年まで専門誌「月刊浪曲」に連載した名人35人と、追加取材した2人が、修業時代の苦労やプライベートの裏話、芸への思いを語る。半数近くが鬼籍に入った今、貴重な証言集となった。

「浪曲は昭和30年頃まで落語や講談をしのぐ大衆芸能の王道で、三門博や二代目広沢虎造は所得番付の常連でした。そんな全盛時代を知る浪曲師たちの墓碑銘でもあります」

第2部の「木馬亭ファンナル・カウントダウン」は、92年から2003年まで落語愛好家の機関誌に連載したエッセーをまとめた。「浪曲が瀕死状態です。木馬亭に来てください」。そんな初回の書き出しに始まり、定席の見応えを編集者ならでの軽妙な表現で若手へ

「若手の伸長も目立ち、さまざまな浪曲師が多様な活動をしている。未来は決して暗くない」

東京報道 浦崎竜馬



創英社 1728円

